

革トランク

宮沢賢治

青空文庫

齊藤平太は、その春、なををか 檜岡の町に出て、中学校と農学校、工学校の入学試験を受けました。三つとも駄目だと思つてゐましたら、どうしたわけか、まぐれあたりのやうに工学校だけ及第しました。一年と二年とはどうやら無事で、算盤そろばんの下手な担任教師が齊藤平太の通信簿の点数の勘定を間違つた為ために首尾よく卒業いたしました。

（こんなことは実にまれです。）

卒業するとすぐ家へ戻されました。家は農業でお父さんは村長でしたが平太はお父さんの賛成によつて、家の門の処ところに建築図案設計工事請負うけおひといふ看板をかけました。

すぐに二つの仕事が来ました。一つは村の消防小屋と相談所とを兼ねた二階建、もう一つは村の分教場です。

（こんなことは実に稀まれれです。）

齊藤平太は四日かかつて両方の設計図を引いてしまひました。

それからあちこちの村の大工たちをたのんでいよいよ仕事にかゝりました。

齊藤平太は茶いろの乗馬ズボンを穿はき赤ネクタイを首に結んであっちへ行ったりこっちへ来たり忙しく両方を監督しました。

工作小屋のまん中にあの設計図が懸^かけてあります。

ところがどうもをかしいことはどう云^いふわけか平太が行くとどの大工さんも変な顔をして下ばかり向いて働いてなるべく物を言はないやうにしたのです。

大工さんたちはみんな平太を好きでしたし賃錢だつてたくさん払つてゐましたのにどうした訳かをかしな顔をするのです。

（こんなことは実に稀^{まれ}です。）

平太が分教場の方へ行つて大工さんたちの働きぶりを見て居^をりますと大工さんたちはくるくる廻^かつたり立つたり屈^{かが}んだりして働くのは大へん愉快さうでしたがどう云ふ訳か横に歩くのがいやさうでした。

（こんなことは実に稀^{まれ}です。）

平太が消防小屋の方へ行つて大工さんたちの働くのを見てゐますと大工さんたちはくるくる廻^かつたり立つたり屈^{かが}んだり横に歩いたりするのは大へん愉快さうでしたがどう云ふ訳か上下に交通するのがいやさうでした。

（こんなことは実に稀^{まれ}です。）

だんだん工事が進みました。

齊藤平太は人数を巧く組み合せて両方の終る日が丁度同じになるやうにやって置きました。それから両方丁度同じ日にそれが終りました。

（こんなことは実に稀れです。）

終りましたら大工さんたちはいよいよ変な顔をしてため息をついて黙って下ばかり見て居りました。

齊藤平太は分教場の玄関から教員室へ入らうとしましたがどうしても行けませんでした。それは廊下がなかったからです。

（こんなことは実に稀です。）

齊藤平太はひどくがっかりして今度は急いで消防小屋に行きました。そして下の方をつかり検分し今度は二階の相談所を見ようと思いましたけどどうしても二階に昇れませんでした。それは梯子がなかったからです。

（こんなことは実に稀です。）

そこで齊藤平太はすっかり気分を悪くしてそつと財布を開いて見ました。

そしたら三円入ってゐましたのですぐその乗馬ズボンのまゝ渡しを越えて町へ行きました。

それから汽車に乘りました。

そして東京へ遁にげました。

東京へ来たたらお金が六錢残りました。齊藤平太はその六錢で二度ほど豆腐を食べました。それから仕事をさがしました。けれども語ことばがはつきりしないのでどこの家でも工場でも頭ごなしに追ひました。

齊藤平太はすっかり困つて口の中もカサカサしながら三日仕事をさがしました。

それでもどこでも断なられたうとうならをか岡な工学校の卒業生の齊藤平太は卒倒そたうしました。巡査がそれに水をかけました。

区役所がそれを引きとりました。それからご飯をやりました。するとすっかり元気になりました。そこで区役所では撒さん水夫すゐふに雇よひました。

齊藤平太はうちへ葉書を出しました。

「エレベーターとエスカレーターの研究ための為急に東京に参まゐり候さふらふ、御不便ながら研究すむうちあの請負の建物はそのまゝお使ひ願ひ候」

お父さんの村長さんは返事も出させませんでした。

平太は夏は脚かく気にかゝり冬は流行感冒かふくです。そして二年は経たちました。

それでもだんだん東京の事にもなれて来ましたのでつひには昔の専門の建築の方の仕事に入りました。^{すなは}則ち平沢組の監督です。

大工たちに憎まれて見廻り中に高い処^{ところ}から木片を投げつけられたり天井に上つてゐるの知らないふりして板を打ちつけられたりしましたがそれでも仲々愉快でした。

ですから斉藤平太はうちへ斯^かう葉書を書いたのです。

「近頃立身致し候。紙幣は障子を張る程有^{これあり}之諸君も尊敬^{つかまつり}仕候。研究も今一足故^{ざんじ}暫時不便を御辛抱願候。」

お父さんの村長さんは返事も何もさせませんでした。

ところが平太のお母さんが少し病氣になりました。毎日平太のことばかり云ひます。

そこで仕方なく村長さんも電報を打ちました。

「ハハビヤウキ、スグカヘレ。」

平太はこの時月給をとったばかりでしたから三十円ほど余つてゐました。

平太はいろいろ考へた末二十円の大きな大きな革のトランクを買ひました。けれどももちろん平太には一^{いっちゃん}張羅の着てゐる麻服があるばかり他に入れるやうなものは何もありませんでしたから親方に頼んで板の上に引いた要^いらない絵図を三十枚ばかり貰^{もら}つてぎつしり

それに詰めました。

(こんなことはごく稀^まれです。)

齊藤平太は故郷の停車場に着きました。

それからトランクと一緒に俥に乗って町を通り国道の松並木まで来ましたが平太の村へ行くみちはそこから岐^{わか}れて急にでこぼこになるのを見て俥夫はあとは行けないと断って賃錢をとって帰って行ってしまった。

齊藤平太はそこで仕方なく自分でその大トランクを担^{かつ}いで歩きました。ひのきの垣根の横を行き麻ばたけの間を通り桑の畑のへりを通りそして船場までやって来ました。

渡し場は針金の綱を張ってあつて滑車の仕掛けで舟が半分以上ひとりで動くやうになつてゐました。

もう夕方でしたが雲が縞^{しま}をつくつてしづかに東の方へ流れ、白と黒とのぶちになつたせきれいが水銀のやうな水とすれすれに飛びました。そのはりがねの綱は大きく水に垂れ舟はいま六七人の村人を乗せてやつと向ふへ着^とく処^{ところ}でした。向ふの岸には月見草も咲いてゐました。舟が又こつちへ戻るまで齊藤平太は大トランクを草におろし自分もどっかり腰かけて汗をふきました。白の麻服のせなかも汗でぐちやぐちや、草にはけむりのやうな穂が

出てゐました。

いつの間にか子供らが麻ばたけの中や岸の砂原やあちこちから七八人集つて来ました。全く平太の大トランクがめづらしかったのです。みんなはだんだん近づきました。

「おお、みんな革だんぞ。」

「牛の革だんぞ。」

「あそこの曲つた処あ牛の膝^{ひざ}かぶの皮だな。」

なるほど平太の大トランクの縮金の処には少しまがった膝の形の革きれもついてゐました。平太は子供らの云ふのを聞いて何とも云へず悲しい寂しい気がしてあぶなく泣かうとしました。

舟がだんだん近よりました。

船頭が平太のうしろの入日の雲の白びかりを手でさけるやうにしながらじつと平太を見てゐましたがだんだん近くになつていよいよその白い洋服を着た紳士が平太だとわかると高く叫びました。

「おゝ平太さん。待ちでだあんす。」

平太はあぶなく泣かうとしました。そしてトランクを運んで舟にのりました。舟はたち

まち岸をはなれ岸の子供らはまだトランクのことばかり云ひ船頭もしきりにそのトランクを見ながら船を滑らせました。波がぴたぴた云ひ針金の綱はしんと鳴りました。それから西の雲の向ふに日が落ちたらしく波が俄かに暗くなりました。向ふの岸に二人の人が待つてゐました。

舟は岸に着きました。

二人の中の一人が飛んで来ました。

「お待ち申して居りあんした。お荷物は。」

それは平太の家の下男でした。平太はだまって眼をパチパチさせながらトランクを渡しました。下男はまるでひどく気が立つてその大きな革トランクをしょひました。

それから二人はうちの方へ蚊のくくん鳴く桑畑の中を歩きました。

二人が大きな路^{みち}に出て少し行つたとき、村長さんも丁度役場から歸つた処でうしろの方から来ましたがその大トランクを見てにが笑ひをしました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷

1983（昭和58）年12月20日初版第6刷

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

革トランク

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>